

# 病虫害発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所  
TEL 0736(64)2300

## < 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病	並 紀北の一部 で多		ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	やや少 やや少
	紋枯病 縞葉枯病 ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ コブノメイガ 斑点米カムシ類	並 並 並 並 並 並 並 並 やや少 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	やや少 並 並 並 並
			カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 やや多 やや多 並
野菜	疫病 モザイク病 アブラムシ類 ハダニ類 ミナミキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ	やや多 並 並 並 並 やや少	果樹全般	カメムシ類	紀北：多 県南部(有 田以南)： やや多

## 気象予報

1か月予報（予報期間 7月21日～8月20日 大阪管区气象台）

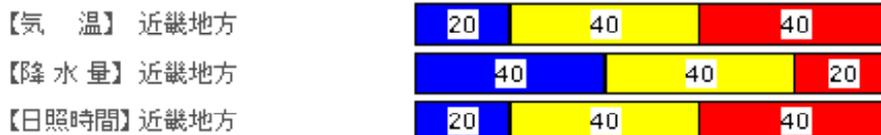
< 予想される向こう向こう1か月の天候 >

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
8月	和歌山	28.1	和歌山 86
	潮岬	26.7	潮岬 233

# I. 水 稲

## 1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 並 (紀北地域の一部で多)

(2) 予報の根拠

- ① 紀南地域の早期水稲における7月中旬の葉いもちの発病株率は、0% (平年13.6%) であった。
- ② 紀北・紀中地域の普通期水稲における7月中旬の葉いもちの発病株率は0.8% (平年4.8%) であった。
- ③ 紀北地域の一部のは場で多発生が認められている。7月25日の葉いもちの発生ほ場率は、海草郡紀美野町長谷で100%、紀の川市貴志川町国主で40%、和歌山市西で87.5%、和歌山市境原で94.1%であった。
- ④ イネいもち病発生予測システム (BLASTAM) によると、清水のアメダス観測地点において7月4～5日に、龍神のアメダス観測地点において7月14～16日に連続した感染好適日が観測されている。
- ⑤ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ末期の防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場ではその5～7日後の穂揃い期にも薬剤を散布する。
- ② 常発地では次年度から罹病性品種の作付を避ける。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀南地域の早期水稲における7月中旬の発病株率は0% (平年3.6%) であった。
- ② 紀北・紀中地域の普通期水稲における7月中旬の発病株率は、0% (平年0.8%) であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂期に発病株率5%以上のほ場では、穂ばらみ期に薬剤散布を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加散布を行う。

## 3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀南地域の早期水稲における7月中旬の発病株率は、0% (平年0.1%) であった。
- ② 紀北・紀中地域の普通期水稲における7月中旬の発病株率は0% (平年0.1%) であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量は並と予想される。

## 4. ニカメイガ 第2世代(紀北・紀中地域)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲、紀北・紀中地域の普通期水稲では、被害を認めていない (平年25株あたり被害葉数: 0.0)。
- ② 4月1半旬から7月4半旬まで、フェロモントラップ (紀の川市) では誘殺されていない (平年0.5頭)。
- ③ 近年、発生が極めて少ない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代幼虫による心枯茎を認めたほ場では、第1世代成虫の予想発蛾最盛期（平成8月3半旬頃）から1週間後までの間に防除を行う。

#### 5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域の早期水稲では3.2頭（平成6.0頭）、紀北・紀中地域の普通期水稲では6.4頭（平成9.7頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～4半旬までの誘殺数は、紀の川市1頭（平成11.3頭）、上富田町0頭（平成0.8頭）、那智勝浦町1頭（平成1.3頭）である。

#### 6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域の早期水稲では3.6頭（平成6.8頭）、紀北・紀中地域の普通期水稲では0.3頭（平成7.8頭）であった。
- ② 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市2頭（平成3.6頭）、上富田町103頭（平成5.6頭）、那智勝浦町146頭（平成120.6頭）である。

#### 7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域の普通期水稲では66.6頭（平成50.6頭）、紀北・紀中地域の普通期水稲では10.4頭（平成83.5頭）であった。
- ② 予察灯による6月1半旬から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市60頭（平成221頭）、上富田町24頭（平成251頭）、那智勝浦町43頭（平成285頭）である。

#### 8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域の早期水稲では0頭（平成0.1頭）、紀北・紀中地域の普通期水稲では0頭（平成0.3頭）であった。
- ② 予察灯による6月1半旬から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市0頭（平成1.6頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町1頭（平成2.0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫4～5頭の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

#### 9. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたりツトム数は、紀南地域の早期水稲では0（平成0.1）、紀北・紀中地域の普通期水稲では0.1（平成0.1）と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢期の防除に重点を置く。

#### 10. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲、紀北・紀中地域の普通期水稲では、被害を認めていない（平年25株あたり被害葉数：8.2（紀南地域）、2.3（紀北・紀中地域））。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1半旬から7月4半旬までの誘殺数は、0頭（平年5.0頭）であった。なお、平年の初誘殺時期は7月3半旬である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 飛来時期から、第1世代の発蛾最盛期は7月5～6半旬頃と推定される。
- ② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。
- ③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、紀南地域の早期水稲では防除の必要性は低い。

## 11. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲の本田では、捕虫網20回振りによる捕獲虫数が6.3頭（平年11.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② 雑草地のイネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までには場周辺を除草する。
- ③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）にも薬剤散布する（「防除指針」参照）。

## II. 野 菜

### 1. 疫病（トマト、キュウリ、ナス、ピーマン）

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 日高地域の露地栽培ミニトマトにおける7月3半旬現在の発生ほ場率は、50%（過去4年間の平均0%）、発生ほ場における発病株率は15%であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。

### 2. モザイク病（トマト、キュウリ、ナス、ピーマン）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 日高地域の露地栽培ミニトマトにおける発生ほ場率は7月3半旬現在、0%（過去4年間の平均0%）であった。
- ③ 8月のアブラムシ類の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

### 3. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月4半旬現在、ワタアブラムシは発生ほ場率11%（平年4.0%）、寄生葉率0.6%（平年0.1%）であった。モモアカアブラムシの発生は認めていない（平年発生ほ場率1.7%、平年寄生葉率0.0%）。

② 黄色水盤（紀の川市）への7月1～4半旬までの飛来数は、16頭（平年34.1頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一薬剤の連用を避ける。

### 4. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月4半旬現在、カンザワハダニは発生ほ場率11%（平年31%）、寄生葉率9.4%（平年8.1%）であった。ナミハダニの発生は認めていない（平年発生ほ場率15%、平年寄生葉率1.5%）。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性が発達している事例が多い。同一薬剤の連用を避け、タイプの異なる複数の殺ダニ剤を交互散布する。

### 5. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月4半旬現在、発生ほ場率22%（平年26%）、発生葉率4.4%（平年4.7%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ナスでは、選別時に被害果実を認めたら防除を始める。

② 施設では、栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

### 6. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月4半旬現在、発生ほ場率0%（平年4.1%）、発生葉率0%（平年1.3%）と平年に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設では栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

### 7. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月4半旬現在、発生を認めていない（平年発生ほ場率4.8%、平年発生葉率0.2%）。

② フェロモントラップによる7月1～4半旬の誘殺数は、紀の川市11頭（平年33.4頭）、和歌山市100頭、御坊市43頭（平年176頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 中・老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫期（網目状の被害葉がみられたとき）の防除を心がける。

- ② 抑制エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

#### 8. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる7月1～4半旬までの誘殺数は、紀の川市2頭(平年10.2頭)、御坊市6頭(平年101.2頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ハスモンヨトウに準ずる。

## Ⅲ. 果 樹

### <カンキツ>

#### 1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北(海南市下津)、紀中、紀南(田辺市以北)における7月4半旬の発病園率は28%(平年50%)、発病度は0.9(平年2.2)と平年よりやや低かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 秋雨時期の後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。  
② 枯枝や剪定枝の除去を徹底する。

#### 2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北(海南市下津)、紀中、紀南(田辺市以北)における7月4半旬の発病園率は31%(平年29%)と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風対策に努め、台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。  
② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除も徹底する。

#### 3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北(海南市下津)、紀中、紀南(田辺市以北)における7月4半旬の発生園率は36%(平年38%)と平年並であった。寄生葉率は10.8%(平年12.9%)と平年並で、100葉あたり雌成虫数は50頭(平年53頭)と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤を年間に2回以上使用しないことが重要である。

#### 4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第2世代2令幼虫最盛期 8月4半旬(平年並)  
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）での第1世代成虫の初発時期はやや遅かった。
- ② 気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 発生園では、8月中旬に散布むらのないように葉裏まで十分量散布する。

#### 5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における7月4半旬の発生園率は14%（前年13%、平年16%）と平年並であった。
  - ② 気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 寄生果率が15%以上または100果あたり15頭以上に達すると防除する。
  - ② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

#### 6. ゴマダラカミキリ

- (1) 予報内容 産卵量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県予察ほ場（無防除）および各地域における初発の時期はやや遅く、発生量は平年並であった。また、7月の成虫の発生量は平年並であった。
  - ② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生が多い園では登録のある薬剤の樹幹から株元への散布を行う。

### <カ キ>

#### 1. 炭そ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北地域では7月中旬現在、果実の病斑は認められなかった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 発病枝や発病果実を剪除する。
  - ② 夕立が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近した場合は事前に薬剤を散布し、できなかつた場合は台風通過後に散布する。
  - ③ 密植園の風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

#### 2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北地域における7月中旬の「富有」の発病葉率は10.0%（平年12.3%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬剤は葉裏をねらって丁寧に散布する。
  - ② 盛夏期には病勢がおさまるが、分生子は飛散するので防除が必要である。

#### 3. 円星落葉病、角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 紀北地域では7月中旬現在、発病葉は認められなかった。

- ② 同地域では前年10月の「富有」における円星落葉病の発病葉率は18.6%（平年2.0%）、角斑落葉病の発病葉率は36.8%（平年21.2%）と平年よりやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。  
② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

#### 4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における7月中旬の「富有」の寄生果率は4.9%（平年13.2%）、「平核無」・「刀根早生」の寄生果率は1.1%（平年2.6%）であった。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 8月上中旬が1齢幼虫の発生時期にあたり、防除適期である。  
② 薬剤が果実に十分かかるよう茎葉の混み合いをなくし、丁寧に散布する。

### <果樹全般>

#### 1. カメムシ

(1) 予報内容 紀北地域：多 県南部（有田以南）：やや多

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による県北部（紀の川市粉河）のチャバネアオカメムシ誘殺数は5月以降増加し、7月になって急増した。ツヤアオカメムシの誘殺数も6月以降多い状況が続いている。  
② 予察灯による県南部（みなべ町東本庄）のチャバネアオカメムシ誘殺数は7月1半旬や4半旬に多い時期が見られたが、それ以降は平年並みの水準となっている。  
③ 紀北地域における7月中旬の「富有」の被害果率は0.2%、「刀根早生」・「平核無」の被害果率は0.2%と被害が見られ始めている。  
④ ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は0.68であり、果樹カメムシ類の発生量に対して餌となる球果の量が不足気味となるため、7月下旬以降、被害が増加すると考えられる。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。  
② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ホームページ <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/  
boujyosyo-yosatsujyohou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyohou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。